



畫本西遊全傳

編
壹

遠21
2500
40-21



天保六年乙未孟春發兌

岳亭丘山譚



繪本西游記

三篇
十冊

葛飾戴斗畫

油漬

通俗西游記三編叙

油漬

予夙有勝癖每逢熙々春煦之候未嘗
能無遠游之志而不果丁亥蚕月賴遇
幸神之誘宿裏糧裝西遊之行李經紀
迴阿十月之初創入攝儼居張業淹留
於今七年恍如一夢間日書賈某携來
一書索予翻譯採閱之西游之真詮也

特21遠へ門
號2500
卷40-21

予固不學殊不解俗語固辭再三書賈
不敢許不得已此夕創就煇公續一回
茫然不知所向絕似五里霧中人熟讀
數回塵似覺其大旨強下筆闕疑省不
通粗解釋其意雖然比之先哲翻釋之
書豹尾續貂固無論紕謬亦應不寡書
成予竊有感玄奘之西遊者所經見崇
所到見重遂到西天拜佛得經予西遊
所經越苦所到喫艱未得其志何其事
之霄壤乎獨嘆搦筆云爾

于時天保四年秋八月浪蕩詞花園
中寒燈下誌之

岳亭五岳





西梁國女王

到底孤陰固不生
 儼求得久難成
 落花流水終無意
 枯木寒巖豈有情

岳鼎




羅刹女
一名
鐵扇公子

羅刹女

綠^一之^二世^三恩^四寄^五幽^六懷^七自
 在^一卷^二舒^三吾^四子^五來^六一^七扇
 他^一人^二附^三屬^四了^五法^六也^七急
 雨^一完^二生^三涯^四

神歌堂



會古洋也三編下

等



假まが孫まご悟ご空くう

會見百卷之三編之五

五

假悟空六耳稱猴

綵花雖惡鼻無鬚画
餅肖形口不甘優孟
叔教真假際離竟未
破ス老瞿曇

定賢鳥

孫悟空

長



七情女子

盤
糸
洞

Ami Kōshiki no Jūmei

糸の西風言三糸之甲

信

七情女

長一絲縈得古一崆一峒名
實俱稱點一知蟲一狝一翮
潜一鱗術殊幻一網一羅一
破事終空

五岳島

繪本西遊記二編卷之壹

法性西來逢女國

心猿定計脱烟花

岳亭丘山譯



油漬

却説二藏師徒の老婆が家を立ち出て二四十里も行ゆのふ忽二構の
城地あり是則ち西梁女國の二藏二個の徒を顧て曰く此国貴
人老幼都て皆婦女なり你们情愿で往来ふ放蕩の占又あるべし
二個師父の命も遵ひて行頓て東門の街小出る小衆部の国人四個
の者の来るを見て手と拍て大笑人種未だりて諸方より群集
つ立地路を塞て通さば四個の者の上前難く怎麼のせんといふ
小八戒曰く我今道と捨固て見せ候やんと舌を拳たわゆる耳を振
くこて嘴と二起し唇と二起し一色呵と呐喊の如き何うの以て怖るらん
両辺へ奎的ぞ乱舞する四個の者の打笑つ上前行廻ふ一人の女官路



三藏
師徒
女國
到

の一邊ふ立て高き小嘴と個々慢小城門ふ入へるは
名を名宣傳子め記し暮人国王小奉其後小行へ二藏
閑て馬と下りて女官小連て一箇の官舎小到り着小門の上小額を
解て迎陽鼓の二字と記せり二藏行者小向ひ昨日波云詞果と
誠りとして裡小入て座のへむ女官茶と侑り禮畢て稟々る其人の迎
鼓の馱をふて俵列位の那里より来るの僧ふと我師父の便ち唐帝の尊
大唐より西天小到り徑を求るの僧ふと我師父の便ち唐帝の尊
て二藏と号る又吾們三個の唐御子の御子子ふて國文を寫し
願くは貴婦這國文を証見とて国王小奉聞ちて快く吾們と西方
行しめる人馱筆と採て始終と寫著し敬慕く二藏を禮拜し暮人
僧のまゝのしるふを知り遠く神迎へゆも出候の罪を救させり人

变的分付て齋を侑り万般と款待せ暮人へ国王小奉聞くと國文
と查勘悉々西方へ送る候ふがと云二藏惟喜て謝合し迎陽館小宿
しの人を馱の衣冠を整へ城小入て国王小見え逐一小奉聞と西梁
國の女王是を聞て大い小惟喜文武の女官小向ひて曰く吾國中
解より以未更小男子を于法おいて陸陽の道を生かす今日唐王の
尊を我國小奉のの實小國家の大伴をむや我彼御子聖僧を迎
て国王と做我の自皇后と成て陸陽配遇て子を生じ永世帝業を傳
を豈善かむとや作肖吾金屋生彩艶玉鏡展光明と夢見ころを
便ち此吉兆と云んと曰へを衆位の女官們一齋小頭を傾け主公の命
至極せり寔小是万代小家を傳る尊計をくると衆心く勇を伸看け
る以時馱の口、當下彼師を見小唐僧の相貌の堂々として實

小国君の体と做つと雖も唯二個の徒牙們取相克悪ゆと妖魔
 の如く更小人小形と成り他們の住め置ても快活な一園文と查勘て
 彼二個小諦與西方小遣と成り徑を取せ唐師等一個と住め置へ衆位
 女官曰く駭巫の詞理小當と成り唯配合の支媒始衆ての物のだらふに
 女王曰く然を當駕大師を媒始と成り駭巫の主婚と成べし越早迎陽
 鼓小到と成り唐師等小此言又と説話よ愈心諾許さる時我城を出て
 是を迎へて大師駭巫勅を受けて急ぎ迎陽鼓小ぞ到りたる時三藏
 を大師の来るを聞て行者小對ひ唯今大師爰小来る何の詔ら
 ん行者曰く是必は婚姻と求るるべし三藏曰く小驚き他若強て我
 小勸住は怎麼と善めらん行者曰く老孫能處置ある他門の寺勸
 住るる日望小任せて婚姻と套上る人と成り云も果さる小大師駭巫

入来り互小禮畢と成り大師の曰く唐師等小降るに惟喜と告候らん
 藏の曰く我の出家つと何程の夏も然様小歡喜は大師曰く抑
 国の西梁女国と成り閩闍より孫隆の国より今伴僂小師等聖僧此
 國小降臨しる一乃望吾國一圓の富貴を以て師等を入贅と成り南
 國と成り此と成り吾國皇太后と成り成んと願ふ是故小貧道小命と
 媒始と成り駭巫と成り婚禮主と成り師等快く其意小遵ひり二藏唯頭と
 低て一向小答は大師又曰く大丈夫と成り時小應と成り行るるべしと成り豈
 一國と成り譲つと成り女婚と成り支天下小又右をらんや速小師返辭有へ
 きつり二藏増々答は歡子の如く啞の如く一言の應ゆなり大師一
 向と成り時二藏終小行者小向ひ汝の此義志慮思ふや行者曰く
 老孫是と考る小師父此處小止るるひて善かんと成り存るる二

藏の曰く我此處に止るを誰の西天に到りて経を把まらる者ありんや
 大師の曰く貧道宜く計ひ候も先唐師の我國王と婚禮を
 せしめ爰に止る帝土と成せり二個の御子達の婚姻の宴席海
 をも園文を查勘西天に遣りて経文を取せり行者聞て大師
 の辞大いに小理う我師父を爰に止め置老孫們二個西天に行
 て経を把まらる爺娘を見え盤纏を貫ひ大唐に候りんと云を
 大師駈逐是を聞て大いに小惟喜行者を拜謝し長老又くの因心悟小
 成ぬ我々早く立歸て國王に奏問し城を出て迎奉らんと云小惟喜
 歸りて二藏の行者に向ひ此漢猴都て我を弄殺ゆと此處に捨置
 婚姻を候も你們西天に到りて仏を拜して経を求めんと我假令死と
 申す申すを候も行者曰く師父焦慮あるべしは老孫師父

の尊意を能悟りてこれを賣小此を候も我々唯悲き此處に來
 り此小逢ぬ渠が望む處ゆりて謀計を為さば師父爰を道れ給
 ふ支拂ひ難うん其仔細の渠吾望切りぬ時の園文をも查勘し
 我々と西方へ送るべしは儻又惡念を發るば支勢を以て師父を害し
 尊身の肉を分けて香臺と候へきり然るを吾倫手口を揺り支能
 ば師父の爲め是を防むと勢を打殺さん此二國の人都ては精小有
 ば平人を打殺さん竟師父原ま忍びぬらざる如く二藏の曰く你ら
 言處にありと雖も唯怖る國王我を招て配命の礼を行ひぬ吾
 仏家の徳業を破り原の人間に墮落せり行者聞て是此も煩
 惱す今日渠城を出て師父を迎て婚姻をせり皇帝の礼を行へば
 向師父管に拜退せし音車に乗て城に入國王を賤く園文を香臺

さき我々と招て通西天へ遣すと云ゆ人倦又吾們二個城と出る
時国王を勸めて城外へ送りて送るゆ人其時老孫定身の法を行ひ国
王とすれめ文武の群臣們立定身の假置師父と馬小乗を遣り
百里を急ぎ然りて法を解饒を国王の群臣も衛々小飯と云ふ是
衆が命を助け師父も又恙なく是を尋て假親脱細の計策と云
万全の方便うづばや三藏方の小惟喜再三行者と謝しゆ此時
死すや国王自親師迎小出る唐師早く準備あつてと云ふ
を二藏三個の後牙と俱小迎陽鼓と出迎る国王衆位の女官
を引領て輦小駕て来り四個の前小進と那と唐師早くと師
指ざりて錦繡の衣着る者便ち是る女王熟々伺ひ看小果然二
藏一妹の人物ゆと其相貌尋常たるは女王心中たの小諸僧三藏

の手を奪て曰く御弟音車小登り金堂殿小到り我と配合の礼と
做り三藏の戦々競々中酒小酔るどく忙然として左座り行
者一違小是を見て師父然りて小謙退するは皇后と俱小音車
小駕ゆ人と勸めりてを二藏没奈何惟喜き面貌と做て女王と俱
小音車小駕ゆ文武の女官是を見て列位を眼形勢ゆ城中
小帰り入行者ら輦二個の馬を牽行囊と荷擔つて五鳳樓の下小
到る此時殿中嚷々として今宵伴ひ良辰るは女王唐師を婚
と做りし時日黄道吉日のしを御弟と皇帝の位小即奉りて改え
と行ふると先堂中小樂と奏し左の方の素懸と設け右の方を
蘭筵と連ひ文武の女官来りてまゝりて席小着二藏と女王を礼拜し
行者ら輦二個とも左の方の筵席ゆ万般と款待つて君臣伸眉の

がたき 女怪 三蔵を 根去



歡宴の宴の膳々々ど見えりける斯て酒の園酣の成るる時三藏女王
 小向ひ快く園文と書勅二人の筆を西天小送り給へ女王是の遣ひ
 園文を拿まゆと命いりける行者則ち園文と捧ぐ女王是と排き
 見ゆ上首唐王の玉印あり其次の宝象国烏維国車運国の玉印
 と連ひり國王三藏の對ひ園文の中へ念慮三個の神子子の姓名
 を記さるや二藏答て凍亦石末唐朝の人物小ありは皆是路
 茅子ゆして召領来し此故小姓名と寫着さるる女王聞て然
 あらむ我二個の姓名と寫着候とんと云二藏曰く階下奈何も
 善く計ひ給るべし此時女王筆と採て悟空悟能悟淨と三個の名
 を記し華押と寫竟と行者小速與給ひりける行者是と請取て
 後女王と拜し別と告奉る女王金銀若干と賜り路の盤纏と助ん

と為給へども行者敢て是を受ひ二個とも疾打粉りしを二藏女王小
 向ひ万望ま階下首僧と俱小他們と城外を送り給んや貧僧能々
 分付とき仔細あり女王謀計とい撃小も知は御茅の詞理さると頭
 鳳輦と備て二藏と俱小打駕城の西門と出て遠く送る小二個の後
 茅鳳輦小向ひて曰けり女王遠く送せり我侷爰ふ別沙奉ら
 んと云云二藏急心の輦を乘下鳳輦小打向ひ階下の是下り還り人我
 併に西天の赴くべと云云女王聞て大り小驚き色を失ひりし事
 御茅も念慮異心ゆふふや誰らある彼絶止と云宣の處小立地一陣の旋風
 現と登つて那里より一個の女遊り出唐僧徐と我と風月の情とせん
 と云も敢て二藏と肥相と空中小赤昇り時跡もつ失つるは行者
 こそ思惟方り小遠い師父の那里へ行らひりやと叫々も悟淨が曰

唯今の女が風を弄し抜く行方行者同由我に依り早に追趕し
云ふ疾く雲ふ寸刻空中遙小昇つて八戒悟浄由引連て雲の飛
乗那里ともなく追行くる彼女王と上首衆位の女官亦たりの女馬
呆臉呆天と拜し此唐僧亦の宣ふ是白日昇天の羅漢なり我眼
ありまがら尋常の僧徒と思ひ万般心と費しる社思ふて有るごとく
空々と城中へ還り

色邪淫戲唐三藏

性命修持不壞身

却説行者が輩三個の虚空小騰を踏で伺ひくる小彼旋風西北
を指て向捲のく三個是を追駆て一座の高山小到りくる時立地風息
塵静つて妖怪が行方を知り行者們是を見て此高山必は妖怪の巢
穴とんと雲を下て尋見小一箇の青石あり其形屏風のごとく

光明ありて美き変云ん方々これ後辺小兩扉の石門あり上小六箇の大
字を鑄て毒敵山琵琶洞と記し行者曰く你们皆死小在て伺へ
我洞の裡小入て師父を尋ぬごとて蜜蜂兒と愛して門の縫裏鑽入り
潜り入門を越る更二重ゆと一箇の甚亭あり爰小一個の女怪座し居
て左右の許若の了髻とも隨従入行者の花亭の桶子小止り居て
是と見小亦兩個の蓬頭の女両盤の熱騰々と立麵食と捧まると彼
女怪了髻と近着て快く唐僧を伴ひまると分付くは了髻と後
の房小到り二藏を扶け出まると彼女怪曰く唐師等心と排對て
泉より人我這里の西梁女国の富貴者華小の及むと雖も甘き蜜の
清閑の地小と念仏着徑小の寔ふよ我師等と百紀偕老の夫婦
とらふの豈心泉うきんや二藏更小答とらふ彼女怪亦笑ひ我師等

の葷と食さるると知ら故小葷と素との酒敵と準備せり師等何と
 こともの心小任せて受用し三人三藏想を我今此女怪小接礼もせ
 物も食は居べ必定我を害さるる其上徒等們まが消息無し身と
 遁るべき道なり我且忍びて果が構嫌を伺ふと女怪小向りて吾今女
 菩薩の誠心と感む貧僧の素淨の食物を用ひて女怪三藏の詞を同
 て心の中たの小惟喜二固の破糖饅頭と把二固小劈破て三藏の安三
 藏是と把て食し亦一固の肉饅頭を取女怪小兵女怪笑て曰く御
 矛志塵ぞ饅頭と割びて我小兵らや二藏合掌して曰く我原素菜
 門の身より那ぞ葷と破んや此時行者福子の上小左て窺ひ居る
 小女怪万般小嬉媚の形相と做小ぞ怕く師父の真性と乱さるん
 りと躊躇打忍るりて本相と現し鍔棒と撃てまがり菓り業畜死礼と

為受さるるとた馬蹄道とむを女怪驚き口より一道の烟と噴出唐僧
 を原の処小推して一柄三股の戟と把て跳し出備心懸の怪猿ゆんぞ心小
 我家小入て我容兒と伺ふと老娘の二叉と見んと戟と振て打て菓と
 心行者鍔棒と把て架住さんぐ小戦ひ竟小洞の外小出せを八戒
 と見て急小釘釘と持て突んと女怪八戒がまろと見て勿心身と聲
 かして倒馬毒と使ひて行者が頭と二度突小行者苦阿と响喚て敗陣
 立地小逃出に八戒も亦堪啞て身後小連りて逃去るも女怪は
 其後洞の裡へ歸るる行者へ遙小逃行て頭と抱へ眉を皺めて云々の
 怪いろ渠が兵器一度頭小中一と要準其疾む支堪がく抑奈何の兵
 器らや八戒笑して曰く大暗平日云冷く我頭へ八卦爐中小煉銀
 ころ所ゆて金鍔とり人ども疵着る支能はと自慢と居給ひ今志

悟空
八戒
琵琶洞
敗北



度僅の底小困苦や行者曰く怎何由我頭ハ自ら煉鍛する如く此の刀
斧超刃と雖も傷損ま能は雷公落羅らるとも破たるは火亦焼こ
し能く知は今日以妖怪奈何なる兵器有ら我頭を破めや悟浄
が曰く大奇頭疼之日由亦晚ふ及み師父の下落討難行者曰
く苦くは師父彼洞裡小在て性命更無異ら我今宵の爰小
寐て天明るを待て再般穿鑿とて遂に二個打連て其夜は山の
脚下小安歇たり此時女怪の小的們と呼前後の門を緊く閉く又
伏房小燭と掌香と焚百種の酒敵と安排て二藏を領出幾句と
酒を勧めめ々どと二藏ハ更小口と開き眼と塞て心裡小経を念て惘
然と座り女怪の十分小嬌媚の形を顯し二藏を抱きて你と交藏
て慰ん小快け匡房小入る二藏の他は骨小逢ん爰と怕は

房小入て座り頭を低て一言も交む女怪淫と求て万般と雲雨の情
を説出半夜小到ゆを纏ひ逼りとも二藏漠然とて見とめらる閑
爰もろ一念更小動さるるを女怪竟小骨と發し小的們と呼繩を
拿まらめ二藏を猿猴摸抹ゆと廊下の上小釣揚おき燈光と噴
滅て其身の圍小退きたり斯て夜中明方小到り行者の山の麓小起
出て我頭の疼此二丈愈去成とて復八戒と俱小彼処小到り師父
の静動を伺ん悟浄の昨日の馬と行装を拿まつて爰小待べと
頭て八戒と打連て彼石屏の下小到り行者八戒小向ひ我且裡小入
て昨夜の次矛を師父小訊くと身と爰と密蜂見とらる門の縫裡
鎖より潛り入花亭小到り伺廻らる小彼妖情半夜睡さる
起出に行者廊下の廻り小飛行ん小爰小師父を吊揚置り頭て

師父の頭の上に住すを師父と一色呼々を二藏是と聞て悟を疼く
我命を救へ行者聞て師父昨夜宵の好更の候ひや交々説話人三
藏牙を咬て曰く吾死との然様の更を倣ひ彼女怪昨宵吾小徑ひ
着迫る更半夜るると雖も我曾て衣帯を解け身を汚さば此故小
他賢と替へ斯の如く細縛るる小万望るの難為を救ひて我小徑を
把しめよ此時女怪睡を覚へ徑を把しめよと云色を聞着臥房を轉ひ
出まの唐僧我と夫妻の情を倣何の徑を把んて誰と説話ゆるや
と曰行者慌りて急小門外へ飛出本相を現し八戒を招き師父更小
身を汚し浴ごとと前宵の動静を語りて八戒罵て罷了る々々個直の
和尚より我師父を救んと彼獸子粗肉小釘釘を揚て石門を突破ん
と小的們鼻を見て急小跑進て斯と告ぐとを女怪聞てたりの怒

作ち戟を把し躍り出撲猿野境を度ぞ我門を破るると罵りけ
と八戒大り小賢の無量の賤賈我師父を困陥せ却て口剛く
罵るや早く師父を送る飯さる休が一命をも饒げ女怪や早く怒
り忽ち妙法を行ひ鼻より火を出し口より烟を噴出し戟を拳て八戒
と刺んと八戒釘釘を以て打對ふ行者も鎌棒を帮て是を搦け
三四合も戦ふ時女怪八戒を唇を倒馬毒を用いて刺る多る八戒阿
と叫びて口を咄め疼くを忍びて逃走す行者も俱小敗陣
驚より悟淨が待居る處へ逃飯る八戒の大り小唬ひ不能魔他塔
疼く堪難く卧轉ひて苦々たる此時一個の老媽勿心然と現れ
悟淨行者小向ひ後迎ふまの老媽の何人ぞや行者頭を回て是を
見ふ這老媽の頂の上小祥雲有て蓋ひ左右小香霧ありて身を單

行者多き叫びて你們快く来て觀音菩薩と拜さるゝ八戒
 悟淨悦得うちれた合掌と拜するに井祥雲と踏て市中にお直像
 と現るゝ行者空中にお到り拜告くと曰く老孫唐僧を扶け西方
 へ赴く處にお愛お女怪有て怪き兵器を用ひ老孫が頭を破り八
 戒が唇を傷らう寔にお是を收めて今僕傳にお菩薩を拜に万劫まで
 這女怪を收め我師父を救ひ多人菩薩開ひ他の是蝎子の好精の
 て人と傷損りのの屋上の釣子らう是を倒馬毒とりお吾も亦他ゆの
 近進難今倘唐僧を救んと思はば快く東天門の裡光明宮にお到
 り昂日星官にお救ひを求めれば是を降伏せん仔細を告行の吉慶
 といひて乍ち現し金光を放ち南海にお皈せらるゝ行者雲を下り八
 戒と悟淨お向ひ吾菩薩の告お任せ今より光明宮にお到り昂日星官

を頼むゝ你們父お在て少時待よと云捨て勿心ち勅手雲にお打駕てお
 ち如くお東天門におまゝ行光明宮にお到り昂日星官にお見え々を
 星官悟空を見て大聖何幹有てまの給ふと問ひ行者曰く老
 孫唐僧を保守て西天お行人と為し西梁国にお女怪にお阻礙らば觀
 音菩薩の告お依て懇愛お忝る候ふ万望の星官彼女怪とお捉ま
 我師父を救ひ多人星官是を問て然も吾行て助くると曰ひ頃て准
 備を整へ行者と俱にお毒敵山にお到り八戒悟淨にお見え々八戒
 唇を噛め星官无礼を免し多人疾身にお有て礼をこ行し直能と
 云星官聞て何の病有やと問八戒答て彼女怪にお疼めらるゝと直語
 々を星官聞て我是を治命得させんとて手を以て唇を撫口より仙氣を噴
 霧の人を八戒立地の夜を忘し大にお惟喜幾般ら拜謝する行者が曰く



昇日

星官

亡女怪



昇日

老翁昨日妖怪小頭を破りて上首を破りて今更に痛く今更に痛く
し星官是とも治らんや星官又行者の頭と一度換はるる仙氣を噴懸
下り余毒退きて全快成るるや行者只管伸眉々々夫も星官の行者と八
戒の命とて俗僧西個彼妖怪を傷引出せ我の門外小隠居して渠を此
と待て降伏せよと日を行者八戒公得ころと兩個一齊に門裡へ討
りかまひ彼妖怪是と看て忽ち戦を把て立對ひ十合をうり戦ひ
小妖怪又倒馬毒を用んと行群八戒是と居ると門外へ逃出せり姑
怪統りて鋼を採連取まら此時星官本相と現ると妖怪は立對ひ
是一隻の大公難う一舌喚ぶと見たりと妖怪は本相と頭其大
いさ荒言やどの蝎虫とるる星官又一舌喚ぶと齋く妖怪總身麻とて
倒し即ち戒釘鉈を把て微塵小突碎き殺しとる斯くて星官行者

向ひ今口用さる我の飯をくると日ひて忽ち金光を放ち雲の中を別
を告東去門の還り入行者が輩二個の天小向ひて拜謝し畢り
再び洞中の討入りてを衆部の女們跪下て前をばやう我の更の
妖怪の申すに悉く彼妖怪が西梁女國より招へ来り了鬘を假使
ひ候ふる方望の命を助け給るべとて一奇の敷きくる行者是を
見し思ふに妖怪の氣一向の中有さるるも個々命を助け大家文目へ
故も頻て師父を救ひ出で斯くて一把の火を放りて此洞を焼く
西方向ひて進善くする池清

繪本西遊記三編卷之壹 子 池清

